

野附誠夫先生を悼む

弔 詞

野附誠夫先生は3月12日午後5時47分享年86歳で、安らかに永眠されました。先生のあの温たかいお姿にもはやお眼にかかることができなくなり、深い悲しみの念に耐え難い思いで居ります。

先生は明治32年10月17日山形県下にお生れになり、早稲田中学を経て第一高等学校で学ばれました。大正14年3月東京帝国大学理学部天文学科を御卒業になり、同年4月に東京天文台技手として三鷹に着任され、その後昭和35年3月東京大学を定年退官されるまで35年の長きにわたり、我が国の太陽物理学の観測や研究の強固な基礎をはぐくまれてきました。この間昭和27年には東京大学教授に補せられ、昭和19年から24年間日本天文学会評議員を、昭和32年から2年間を同会理事長を務められ、日本の天文学の発展のために大きな貢献をされました。また昭和30年には、東京大学生産技術研究所の観測ロケットの専門委員会委員長となられ、飛翔体による天文観測の先駆的な役割を果たされました。更に太陽観測を通して国際協力の重要性をいち早く認識され、実行もされました。

先生は第二次大戦中に日食外のコロナを観測するコロナグラフの計画を進められていました。しかし戦争の激化により一時中断されましたが、戦後間もなく、昭和21年には口径16cm 焦点距離145cmのコロナグラフを木製で試作されました。昭和22年、23年、24年と八ヶ岳や乗鞍岳にて実験観測を行い、24年には現在地の乗鞍山塊摩利支天岳山頂にコロナ観測所を創設されました。ここは日本アルプスの中では比較的気象条件に恵まれているとはいうものの、海拔3000mという厳しい環境下に在り、かてて加えて当時の世の中は敗戦後間もない物質欠乏の悪条件の中でしたので、新しい観測所の設立には、東京天文台、東京大学、文部省、大蔵省等の関係者の熱意と努力や、長野県、岐阜県の地元の方々のお暖かい同情と協力に負うところが大きいのは言うまでもありませんが、このような多くの人々の援助が得られたのも先生の御人徳によるものでした。

先生は齡50歳を過ぎておられたにも拘らず厳冬の乗鞍山頂の小さな観測室にて、若い者と寝食を共にし、所員からはオヤジと言われて親しまれていました。テレビが放映され始めた頃、御自分で受像器を組立てられ、当時は大変めづらしいテレビを見に、多くの人が先生のお宅に集まり、酒を飲み交わしたと聞いて居ります。



巧言令色鮮矣仁^{すくなしじん}といわれています。将に先生はよい事は言われぬ方でしたが、独りてに多くの方々と心の交わりが生じられ、親しまれ、信頼されてきました。長野県、岐阜県の地元に行きますと、土地の方々に野附先生はお元気ですかと必ず尋ねられます。乗鞍のコロナ観測所は、今もって先生の暖かい御庇護のお蔭で、円滑な運営が行われています。東京天文台で最初の構外施設であるコロナ観測所の建設・運営が上首尾であったことは、その後の岡山天体物理観測所、堂平観測所、野辺山太陽電波観測所、木曾観測所、野辺山宇宙電波観測所などの施設を構外につぎつぎにつくり、今日の天文台発展の第一歩をふみ出すきっかけとなったと申せましょう。

先生は、自然とも、また人とも、ふれ合いを大切にされました。一つの仕事を追求する上に、国内・国外を問わず多くの人々の協力がいかに必要であるかを身をもってお教え下さいました。今後日本の天文学が歩まねばならない巨大科学への道を着実に進み、天文学の発展に向けて、先生が蒔かれた種を大切に育てて大きな実りとなるよう、私共はなお一層の努力をしてみたいです。

先生とのお別れに際し、日本天文学会を代表し、謹んで御冥福をお祈りいたします。

昭和61年3月15日

日本天文学会理事長

早川幸男